

B 115 着衣量の個人差と皮膚温との関連について
神戸大教育 ○稲垣和子

目的 衣生活の向上と健康増進に役立つ資料を得る目的のため、演者は近年着衣実態の調査を種々行なってきたが、快適とする着衣量は、同一環境温熱条件下で体格や年齢が大畧同一であっても相当の個人差がみられる。そこで個人の理想とする着衣量は、皮膚温と何らかの関連があるかもしれないとの問題をいだし本実験を行なった。若干の成績を得たので報告する。

方法 被検者は健康な成人女子(年齢20~22才)とし、D.B.T. $27 \pm 2^{\circ}\text{C}$ (高温時), $12 \pm 1^{\circ}\text{C}$ (低温時), R.H. $50 \pm 10\%$ (高低温時共), A.V. $15 \pm 1\%$ の人工気候室内で、それぞれ平常服着用時における額、胸、腹、背、腰、上腕、手背、大腿、下腿、足背の皮膚温を測定、60分間の時間的变化をみる。同時に脈拍、呼吸数、口内温、寒暑感覚等を測定した。同一被検者の年間季節別着衣調査より単位体表面積 1cm^2 当りの衣服総重量と気温との関係を考察し、各人の回帰係数を求めた。平均値と標準偏差より着衣傾向を3分類(厚着、普通、薄着)とし、これらと皮膚温との関連をみた。

結果 低温時には手背、足背部は皮膚温の低下が著しい。薄着者は高、低温時共、腹部が他の部位に比して高くなる。これは測定時間および血流量によるものと考えられる。低温時には躯幹部が高温であれば手背、足背部が低くても耐えられる。高温時には薄着者は腹部、手背以外は低温である。一般に厚着者は皮膚温が低く、薄着者は皮膚温が高いのではないかと推測していたが必ずしも言い難く、特に低温時においてその兆候がみられた。